

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370800700		
法人名	社会福祉法人 平成会		
事業所名	グループホーム あやすぎの里		
所在地	熊本県山鹿市鹿北町岩野5497-1		
自己評価作成日	平成22年 1月24日	評価結果市町村受理日	平成22年 5月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=4370800700&SCD=320
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	平成22年 2月24日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

地域の催しやいきいきサロン等関係者との関係作りに努め、参加の機会を持てるように取り組んでいる。また、小学校や子育て支援センターとの調整をしながら、利用者との交流の機会作りに努めている。ケアの向上を図る為になかなか出来ていなかった定期的な勉強会やケースカンファレンスも計画をしながら定期的開催し始めている。ケアプラン作成においても、家族参加による担当者会議が出来ていない状況であったが、積極的な呼び掛けを行い、その方に関わる皆で支えていけるようなケアプラン作りと実施に取り組んでいる。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

山間の静かな所、玄関前に松の木があり、ホームの名称となっている「あや杉」が使われた木造のホーム。中に入ると「あや杉」の大きな柱があり、GH全体の落ち着いた空間を作り出している。理念に謳われている、笑顔があり、入居者一人ひとりの思いを大切に、希望や意向に添えるよう全職員がケアに努めている。併設の特養との連携もよく協力体制が整えられている。家族が気軽に意見の言える雰囲気づくりが行われていて、職員の穏やかな様子に我が家に帰った感じがある。また、職員は自分や家族が入所したいホームにしたいと研鑽に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	常に意識できる様、目に付くところに掲示したり、定期的にミーティング等で振り返るなどし意識の共有を図っている。	地域密着を意識した理念とし、地域との関わりを持ったケアを目標の設定や笑顔・自己研鑽・専門性等職員の行動にも理念が反映されている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のいきいきサロンへ参加するが、その後の日常的な関わりを持った関係作りまでにはつながっていない状況である。	元職員の地域福祉委員の協力を得、地域のいきいきサロンや社協が主催する「100年塾」へ参加している。ホームは法人施設の一角にあるため、地域との繋がりが持ちにくい状態にあり、いきいきサロン等の茶話会の会場にホームを使ってもらえるよう提案している。	地域との付き合いが、少し希薄なので、家庭で余っている鯉のぼりの提供を呼び掛けて、子どもや小学生を巻き込んだ企画を実施したり、「おしゃべりボランティア」の募集など近隣との交流を始められるのも良いと思われる。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域包括支援センター主催の認知症出前講座などに出向き、グループホームの説明をしたり出来る限り、外へ発信する状況づくりに努めているが地域住民の方々の場での話を出来る場作りは出来ていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	外との関わりを持てるような意見の交換を行ない行事等の開催に繋げている。	2ヶ月に1回開催。家族会長、認知症サポーター代表、老人会代表、民生委員、地域福祉会、包括支援センターと多くの参加を得、事業説明や行事の報告を実施。また、意見交換や情報収集などを行いケアに繋げるよう努力している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議時のときに相談を行ったりはしているが、日常的な連絡・相談等を行なうほどの関係性は築けていない。	運営審議会への参加や民生委員へ認知症講座を開催するなど、包括支援センターと協力活動をしている。入居者の相談等での行政との協力・連携もある。	市役所等に出かけた折には、あやすぎの里の広報誌等届け行政の情報をもらう等、より深い連携に期待します。
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	全スタッフがきちんと理解し、身体拘束のないケアに努めている。しかし、定期的な振り返りの為の勉強会等の開催は出来ていない現状はある。	拘束はしないが大前提にあり、施錠もしていない。言葉や言い方も抑制に繋がることを認識しており、事例を基に勉強会を実施している。不穩には、散歩時はじっくり話をしたり、横になってもらうなどで安定を保つ工夫をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	利用者の虐待防止に努めながら、虐待につながってしまうのではないかとと思われるような行為がなかったか等、ミーティングや日常において意見の交換等を行なっている。だが、振り返りの為の勉強会実施までには至っていない		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する研修会等への参加を行い事業・制度について学ぶ機会を持っている。しかし、全てのスタッフに対する内部研修は行えていない為、今後定期的な勉強会の実施が必要。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	家族へしっかりと理解していただけるような説明に努め、面会やTELなどでの相談に際しても、しっかりと理解できる説明に努めている。利用者に対しては、質問がある際には時間を取り説明している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族、また近所の方々より要望等が出た際には、すぐにスタッフ間での検討を行い、可能な限り運営に反映している。	面会の折り積極的に話しかけ、家族の意見要望を聞く努力が行われている。家族会を年1回開催し、事業説明や行事報告を行っている。鯉のぼりを揚げたらという提案があった。	家族会で家族だけでの交流の場を持つなど、工夫されてはと思います。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者は、提案や意見が出た際には十分に時間を取り、しっかりと話の聞き取りに努めている。又、代表者は管理者を通して意見の伝達を行い可能な限りの反映に努めている。	ミーティングの折り申し送りノート等で職員の提案が行われ、日頃の問題提起については代表者や管理者に伝わる仕組みがあり、話し合い可能な限り反映に努めている。休憩時間の改善が行われている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	可能な限りの要望を反映出来る様な職場環境・条件の整備に努めている		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	各スタッフの個性を活かせるような役割分担を行い、適した研修会への参加や発表の場を作るなど各人の能力向上の機会作りを努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部研修会等への参加などの機会を持ち、要望があれば実施できるようにしている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前に家族や関係者からの聞き取りを行い、全スタッフが本人の状況をしっかりと理解し関わられるようにしている。情報を踏まえて、その方の話に傾聴し心を許せる関係作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	出来る限り多くの情報を得られるように、しっかりと時間をかけ聞き取りを行なっている。また、面会の際なども、こちら側から話をするなど、入居後のフォローにも努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	状況に応じすぐに必要と思われるサービスの導入が迅速に行なえるような関係者・期間との連携に努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	その方が何が出来るかをスタッフ間でしっかりと理解し、本人が自信を持って日常生活を送れるような援助の工夫に努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族も積極的に関わられる様な環境作りに努めている。しかし、各家族の状況からなかなかかわりを持っていない家族もあり、今後も検討・や相談・工夫が必要である。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居後も、それまでに関わってこられた方々との連絡も取りながら、サロンへの参加など関係が途切れないような配慮を行なっている。だが、ホーム所在の町外から入居された方への取り組みがなかなか出来ていない状況である。	他の施設に入所している妻に面会に出かけたり、隣接の特養ホームやデイサービス利用者に面会に訪問するなどの支援が行われている。また家族と外出し、自宅に寄ってきたり、馴染みの場所で食事するなど、家族の協力の基での関係支援もおこなわれている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	スタッフ間で情報交換を密に行ない、利用者同士が共に支えあえるような関係作りに努めている。だが、時折スタッフが間に入りすぎているような時もあり、もっとスタッフ間での意識の共有や意見の交換が必要である。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス終了後も。管理者が時折連絡をしたり、担当ケアマネージャーからの情報の聞き取りをしたりしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	生活歴や生活をしっかりと理解し、出来る限り本人の意向を尊重できるような支援に努めている。本人の意向がなかなか聞き取れない方に対するスタッフ間での細やかな検討は必要と思われる。	散歩中や車の中、一緒に食器を洗いながらなど、昔の話を聴く中で、希望や意向を把握する対応が行われている。入居者の表情や返ってくる言葉など聞き落とさないことで、細やかに満足度などを汲み取る努力が見られた。また家族や友人の面会時等、多様な場面での情報収集が努力されている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	家族やそれまでの担当ケアマネージャーや知人に方などから、可能な限りの情報収集を行なっている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人について現状の把握は出来ているが、きちんとしたデータとしての整理が出来ておらず、今後、検討を行い細やかに分かりやすい形でのデータ管理に取り組み始めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎日の生活の中から得たニーズや課題を、スタッフ間でのカンファレンスや本人・家族との話しあい、時には知人や運営推進会議委員のアドバイスを受けて介護計画に反映させ、現状に即したケアやより良い暮らしに繋げるよう努めている。	毎週木曜日にテーマを決めてカンファレンスを実施。随時早い段階で話し合うことで、現状の把握と職員間の共有が試みられている。担当者会議には複数のキーパーソンに声をかけ、出席の依頼をするなど家族とのチーム作りへの努力もなされている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録様式の検討を重ね、その人の暮らし課題が分かるような記録を心がけスタッフ間で共有している。その気づきや課題をカンファレンスという形で検討し、介護計画作成に反映できるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	社会福祉協議会に相談し開催事業に参加したり、地域の核となる方々との連携を取りながら、柔軟なサービスの提供に努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町内から入居の方に対しては、上記のようなサービスを利用するなどしているが、町外から入居の方に対しては、新たな関係作りまでには至っていない現状である。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前の主治医への受診を入居後も可能な限り行なえるように配慮しているが、主治医が変わる場合には、事業所が一方的に決めるのではなく家族等との相談をしっかりと行い納得できる病院への受診を提供している。	かかりつけ医と看護師の信頼関係を重視しており、ホームでの対応の基礎としている。通院は、基本家族同行受診としているが、職員の同行も受け入れ入居者や家族の希望に応じた支援が行われている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	事業所内に看護師が配置していない状況もあるが、状態に変化があるような場合にはすぐに主治医に相談するなどし、利用者・家族の安心に繋げられる様に配慮している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院後、出来る限り面会を行い、状況の把握に努めながら状況を見つめ、本人のストレスの軽減や早い退院へとむすびつける様に勤めている。また、スタッフも出来る限り面会を行ない、信頼関係の維持にも努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	施設としてターミナルケアは行わないとの方針である。併設の特養との連携を密に行い、本人の負担軽減や家族の意向を考慮しながらスムーズな特養への入所が出来るように努めている。	ターミナルケアは行わない方針。常に本人の健康状況を把握し家族や医者と相談し、タイミングを図って併設の特養への移行を行っている。また併設の特養での受け入れも可能なことを提示し、ホームの入居時に特養への入所申込が提出されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急救命士による救急蘇生の直接指導を定期的に行なっている。年間開催数を増やし、全てのスタッフが自信を持てるような今後の取り組みにおいても充実していきたい。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	ホーム内における避難訓練などは、ホーム単独による開催以外にも併設施設と共同で行なう機会も持っているが、地域の方を交えた協力体制の構築できておらず、今後の検討が必要である。	避難訓練年2回実施し、消火器の取扱などの研修も行っている。職員については併設の特養の訓練にも参加し、年1回実施している夜間想定の実施には隣接の施設からの応援も依頼する予定。	夜間対応の救助体制や地域への協力依頼や消防団との協力体制を構築する事が重要と思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	スタッフは接遇の勉強会を行い、意識の共有を図っている。しかし、ちょっとした言葉掛けに、配慮が足りないことも見かけられることもあり、今後も定期的に振り返りを行い、高い意識を維持できるように努めていく。	接遇の勉強会で意識の共有が行われており、意識は高い。トイレや汚染の際の言葉掛けの配慮など、気付かない時はお互いに声掛け合せて気をつけていこうとの向上心があり、言葉掛など耳もとでゆっくりとする等の心配りが見られた。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	会話の中から想いを聞き取れるように傾聴に努め、適切・適度な支援を心がけている。しかし、場面においてスタッフが手を出しすぎたりする事もある為、スタッフ間の意識の統一・情報の共有に努める必要がある。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一日の流れは決めているが出来る限り、本人の意向に沿って柔軟な支援ができるよう努めている。しかし利用者によっては意向が聞き出せないことで、押し付けとなってしまっていないかとも考えられる為、支援の検討が必要と思われる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	可能な限り行なっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	お手伝いが好きな方と一緒に準備、片づけを行なっているが、なかなか使用としない方も多く、気持ちが動くような工夫が必要。片付けは出来る方が限られてしまう現状はある。	テラスでお茶を楽しんだり、おやつづくり等、出来ることがある人と職員が一緒になって、楽しく食事をする工夫が見られる。朝食はまちまちでパンとコーヒー等食欲に応じて臨機応変なメニューになっている。行事の際は、飲酒も希望と状況により、楽しんでもらっている。	西日対策としてまた入居者の皆さんの楽しみにニガウリ等の日よけを作るなども良いとおもわれます。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	1日の状態を考慮しながら、その時の応じて提供している。栄養士を持つスタッフも勤務し始めた為、今後は栄養管理や工夫にも努めていきたい。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	併設の特養に勤務する歯科衛生士による、指導の機会も設け、スタッフの勉強会を行い、本人の能力の応じた口腔ケアが実施でき始めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	本人の状況に応じて、迅速にカンファレンスを行い本人の想いを汲み取りながら、可能な限り本人が出来るような環境作り、配慮に努めている。	可能な限りトイレ使用を目指しているが、本人の意向と安全性や快適さを考慮しての検討が行われている。各居室内にトイレが設置されているが、状態に応じて夜間はポータブルトイレ使用となっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分の確保、食事の工夫を行ないつつ、又主治医との相談を行ない適切な対応に努めている。栄養士を持つスタッフも勤務し始めた為、今後は栄養管理や工夫にも努めていきたい。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の提供時間が午後13:00~16:00に現在行っているが、状況に応じて可能な際には夕食後の時間などにも提供することもある。しかし、なかなか出来夕食後時間で提供できる機会は少ない。	毎日午後を入浴時間としているが、希望に合わせて夜間入浴にも対応している。拒否の方も時間や介助者の変更・足浴などで努力をしている。お風呂が広い湯船につかることに恐怖感があり、シャワー浴の方も。	特養の機械浴を利用したものの、本人が「面倒」とのことで中止となっている、散歩がてらや楽しみとの組み合わせなどで、法人の資源活用し、浴槽につかる機会を再度工夫去れる事に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	温度や湿度管理に努め、夜間安眠が得られるように努めている。どうしても眠れない方に対しては主治医との相談を密に行い適切な対応に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	処方薬について必ず申し送りを行い、内容についての周知を徹底し、皆がきちんと理解するように努めている。又、状況把握にも努め、状態の変化を素早く気付けるように配慮している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	家族や本人方の趣味や嗜好の聞き取りに努め、入居後も取り組む事が出来るような工夫をし、また、新たに楽しみごとを見つけ出せるような配慮にも努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	家族の協力が得られる方については、出来る限り外出・外泊の機会を設けている。その他の方に対しては、受診後の買い物をしたり、月に一度希望される利用者達で、ショッピングに出かけることもある。天気が良い時には近所の散歩も行なっている。	法人のリフト車を利用し、菊祭や梨狩り、八女の伝統工芸館のお雛さま見学等、出掛けしている。ドライブがてら、大きなスーパーへの買い物や「鞆を片づけていたかなー」等、入居者の発言で畑に確認に行ったり、受診の帰り道「つつじが綺麗だった」の会話からつつじの花見に行く等、臨機応変な支援が行われている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金への理解がある方については、小額を本人が管理する方も居られ、買い物の際に支払いを自分でする方も居る。全ての方が所持することは難しい状況もあり、その際には家族、スタッフで管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話等の使用について制限はしていない。希望があれば必要な支援を行なっている。手紙が来たときなど、返事がかかれなかと促したり、希望されれば必要な支援を行なっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	テーブルに季節の花や置物を飾ったり、季節を感じれる配慮をしている。また、不快や混乱を招くような状況があると分かった際には、迅速な対応をし、改善を図っている。	廊下にある作りつけの木製ベンチは、腰掛けると体に馴染み、ゆったりと出来る空間となっている。明るいリビングには食卓やソファでくつろいだり、段上がりの和室には仏壇もあり、大きな掘炬燵では横になるなど思い思いにくつろげるスペースがあり、静かでゆったりとした時間が流れている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下に椅子を設置したり、テーブルを置いたりし、中間的な場所作りにも配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は、本人や家族と相談しながら、配置をし、必要な物が出た場合には、家族と相談しながら用意している。しかし、転倒等が起こり撤去した物もあり、安全を考慮しつつ本人の居心地よさを提供できるような工夫検討が必要	ベット、チェストは備え付け、各部屋に洗面台、トイレがある。テレビやテーブル椅子など配置し、スッキリとしたへやになっており、ふらつきや転倒防止の安全面に配慮されている。畳み敷きの和室とフローリングがあり、それぞれ暮らしやすいよう見守られている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	死角になる部分の整理や危険物の除去、トイレや名印になる物の設置など安全にも配慮しつつ、温かみのある環境作りさらなる実施が必要。		